

原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追及、特集号
第二百十九号

原告団レポート

遺族

北原ヨソノさん

山の中腹まで、ミカン畑がのびて
いる。

北原ヨソノさん（大正五年五月
二十八日生まれ）の住宅は、町を
流れる飯江川のそば、竹飯にある。

「以前は竹飯のお宮の裏だった
のですが、家に入るのに他人の土
地を通らなければならなかったの
で、この土地を買ったのですよ」

と、同居している二女の久仁子さ
ん（昭和十七年一月二十五日生ま
れ）がいう。そばでヨソノさんが、
にこやかに笑って聞いている。

高田町竹飯

大牟田市の北部に隣接する高田
町は、ミカン畑やビニールハウス
の広がる静かな田園地帯である。
町を縦断する道路にも、オレン
ジ・ロードと名がつけてあるほど

玄関前には手入れのいきとどい
たブドウ畑と野菜畑がある。

久仁子さんのご主人は久留米に
通勤、長男はすでに就職し、次男
は八女工業高校に通っている。

北原信治さん（大正三年七月九
日生まれ）が三川鉾大災害で亡く
なっているから、ヨソノさんと久仁子
さんが生まれた。

勤勉な生活

「実は、養子でしてね。私が一
人娘でしたから、近所の人の世話
でした。昭和十年頃でしたから、
好きも嫌いもありません。両親の
いうとおりでした」

信治さんは、瀬高町の出身、二
十二歳。ヨソノさんが二十歳だっ
た。その年の十月十六日、本所建
築課に入っている。

西鉄電車、開（ひら）き 駅まで
自転車で行き、電車で大牟田の建
築課まで通った。建築の仕事は、
性来の器用さで好きだったらしい。

家の修理はほとんど自分でした。
その道具が、今も残っている。

翌十一年七月六日、長女弘恵さ
んが生まれた。



昭和35年夏、三池闘争中ホッパーで。
（前列右から3番目が北原さん）



昭和31年の正月、愛犬とともに自宅の縁側で。

子煩悩な父

「父は魚つりが好きでした。日

戦争が激しくなり、召集がきた。
遠賀川のそば、赤間への勤務とな
り、終戦後も遅くまで残務処理に
あたった。

戦後の混乱期から下へなるまで、
仕事と日曜日は畑仕事と両立させ
て頑張った。年中、朝六時に起き、
六時三十分に出動した。冬などは
暗い中に出かけ、暗くなってから
帰る日が続き、残業になると八
時過ぎることになった。

「そうだったけれど、身体ではな
かったのですが、病気がちでした」
と、ヨソノさんは遠い昔をなつか
しみに話している。

爆発の日には休む予定だったのに……

なんと残酷なことが

あいまいにできない災害責任

う、屋の井戸を作ったがしまわ
るのあたり前みたいになり、楽
しみにしていました」

「この家でも子供は可愛が
りますが、父は……」と、すっ
と子煩悩だったと思えます。

娘の手ばかりですから、普通は
母親が子供たちの洋服などは買っ
てくれるのですが、父がなんでも買っ
てくれるんです。

下の美枝（昭和三十三年十月八
日生まれ）への可愛がりがよくた
らありませんでした」

久仁子さんが、父信治さんの記
憶をひろいおこしながら涙ぐむ。

これは、ずっとあとのことであ
るが、弘恵さんが父に会ったのは
爆発の数日前であった。

「父は魚つりが好きでした。日
曜日は朝早くからつりに出かける
んです。屋になっても帰ってこな
いので、井戸をついて、あちこ
ちさがし回ったものです。

私たちが、父がつりに出かけた
日は、父はつりに出かけた

「あの日、下の娘が膝で夕食をた
べると、屋になっても帰ってこな
いので、井戸をついて、あちこ
ちさがし回ったものです。

私たちが、父がつりに出かけた
日は、父はつりに出かけた

「あの日、下の娘が膝で夕食をた
べると、屋になっても帰ってこな
いので、井戸をついて、あちこ
ちさがし回ったものです。

私たちが、父がつりに出かけた
日は、父はつりに出かけた

「あの日、下の娘が膝で夕食をた
べると、屋になっても帰ってこな
いので、井戸をついて、あちこ
ちさがし回ったものです。

私たちが、父がつりに出かけた
日は、父はつりに出かけた



心労のためか、めっきり記憶もうすれた
というヨソノさん。（自宅玄関前で）

爆発二日目

「私も爆発の音は聞いたのです
よ。夕方、テレビで三川鉾だと聞
いた時、父も下がっているはずだ
と、どきどきしました」

竹飯には、そばの老人ホームに
電話があり、ヨソノさんは電話で
問い合わせた災害を知った。

夜、ヨソノさんは弘恵さん達と
天領病院へ行った。

「いったがえして、廊下まで人
があふれ、ウンウンうなっていた
り、死体を洗っているところでは、
遺品をさがす人が、大声で泣きま
がらうたりして、半べらう目の
底にやきついて、よく眠れませ
んでした」

九日の夜、北原さんをさがした
すことはできなかった。いったん
大牟田市吉野の弘恵さんのとこに
帰った。

「ちよと福川の時期でして、
八日まで休んでいたのです。予定
では九日まででしたが、一日早く

「私も爆発の音は聞いたのです
よ。夕方、テレビで三川鉾だと聞
いた時、父も下がっているはずだ
と、どきどきしました」

「私も爆発の音は聞いたのです
よ。夕方、テレビで三川鉾だと聞
いた時、父も下がっているはずだ
と、どきどきしました」

裁判への道

ヨソノさんは、裁判がはじまる
と、原告団の一人として、福岡へ
出かける。昔々と会って近況を
語りあつたのも楽しみのひとつだ。

「久仁子たちが感動してくれた
ので助かりました」とヨソノさん。
「私たちは、父親とはある程度
長く暮らしていますが、美枝は六
歳で父親に甘えたい盛りでしたか
ら、不憫ですね」

美枝さんは、あまり父親のこと
を触れてほしくないのかもしれな
い。

「本人は口に出してませんが、お
互いに気にかけて話しています」
と姉達はいう。

「災害の責任だけは、あいまい
にしてほしいとあります」とヨソ
ノさんはいう。

美枝さんも、学校を卒業し、看
護婦として福岡で働いている。

「いい相手と結婚して、幸せに
なつてほしいですね」
これは、みんなの願いである。